

2026年06月27日

松阪市議会議長

濱口高志様

市民クラブ

楠谷 さゆり

令和8年度防災塾（2日目）

研修報告書

日時：2026年06月21日(日) 10:30~16:15

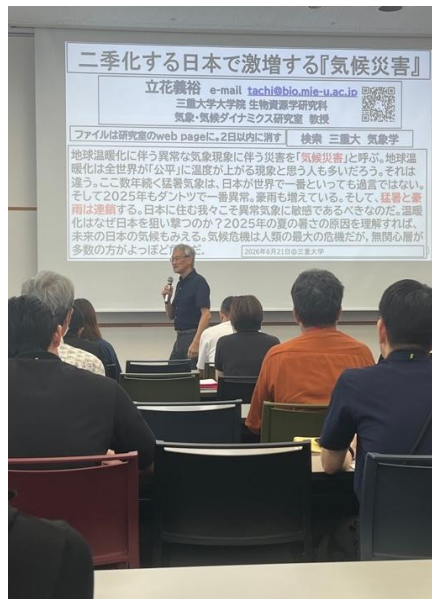
主催：三重県・三重大学 みえ防災・減災センター

講師：①災害をもたらす自然現象：葛葉泰久氏

②三重の歴史災害：都築充雄氏

③二季化する日本で激増する『気候災害』：立花義裕氏

参加者：橘大介、楠谷さゆり



(立花氏の講義)

講義内容

① 災害をもたらす自然現象（地震・津波・風水害）

三重大学・工学研究科・リサーチフェロー 葛葉泰久氏

自然災害発生の誘因には大雨、強風、地震、火山噴火、気候変異などがあり、それらによって引き起こされる災害現象は、河川洪水、高潮、斜面崩壊、土石流、竜巻、地盤振動・液状化、津波、火砕流、干ばつ、冷夏など極めて多種多様であり、その発生には大きな不確定性があって、いつ起こるかについての予測は非常に難しい。

地震は地盤の強振動・変形や土砂・水の運動を引き起こして、また火災などの二次的現象を発生させて、多様な被害を与える。風水害に比べて発生頻度は小さいが、大規模災害をもたらしやすい。

② 三重の歴史災害

名古屋大学減災連携研究センター 都築充雄氏

南海トラフ地震の被害想定は古文書から判ってきた南海トラフ地震の歴史に基づく。根拠となる断層モデルは、1707年宝永地震、1854年安政東海地震、1854年安政南海地震、1944年昭和東南海地震、1946年昭和南海地震の5例の地震をもとに作成した地震断層モデル及び津波断層モデルを採用している。

三重県では令和8年3月30日に新たな南海トラフ地震被害想定を作成。これを基に、南海地震によって発生する被害を正しく理解し、適切な行動に繋げることが重要である。そして県民の生命・財産・地域を守るため、あらゆる主体が総力を挙げて備えていく必要がある。

三重県南海トラフ被害想定レベル1（L1）とは歴史的にこの地域で起こり得ることが実証されている、発生頻度の高い南海トラフ地震で、死者数は約29,000人で、このうち津波による死者が約28,000人と大部分を占めている。これをどうやって減らすかが大切である。

③ 二季化する日本で激増する『気候災害』

三重大学大学院生物資源学研究科 気象・気候ダイナミクス研究室 立花義裕氏

ここ数年続く猛暑気象は、日本が世界で一番と言っても過言ではない。そして豪雨も増えている。猛暑と豪雨は連鎖する。日本の猛暑には理由があり、日本付近は海面水温が上がりやすい地理的要因がある。世界全体も地球温暖化が進んでいるが、特に日本付近は高温になりやすいのである。

どれだけ予知能力が上がって予報が正確になっても、災害は防ぐことができない。なぜなら人は気象に興味がないからである。今後日本は異常気象がニューノーマルとなる。それは日本の国力をも弱め、国益を損ねる。この気候危機の時代において、日本は世界一異常気象に敏感であるべきで、脱炭素の世界のトップランナーとなり、他国を牽引すべきである。

所感

この報告書を作成している本日も 2 個の台風が日本列島に接近し、東北地方では震度 6 強の地震が起こった。猛暑と地震が同時に起こる想定もあるだろうが、台風と地震の二重災害もあり得ることである。台風や地震といった自然災害の素因は変えられず、台風なら予想し、地震に対しても十分な備えをするしかない。一方で、猛暑や豪雨などの「気候災害」は温室効果ガス増であるという一面を考えると人災でもある。人類の叡智を集め、我々も気象に興味を持ち、対策を考えることが大切である。

また、世界で最も自然災害の多い日本は、世界に起こる自然災害について災害救助だけでなく、備えや対策の方法を「輸出」するリーダーであるべきだと思われる。

以上

(報告書作成 楠谷さゆり)